

課題解決力には、リテラシーとしてのコンピュータとしての「一種類がある。」そう説くのは、九州国際大学の山本啓一教授だ。PBL やインターネット等が注目される中、それらを混同した取り組みが多いのではないか。大学教育学会第三七回大会での発表を元に、山本教授にその真意を解説してもらつた。

九州国際大学  
山本啓一

文科省の「産業界のニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業」において、九州・山口グループの八大学による学修評価サブグループ（以ト本グループ）では、平成二十六年度、参加大学の学生で構成されるチーム（一チーム四～五名、全八チーム）を編成し、「課題解決力」育成のための研修を複数回実施したうえで、八つの企業や団体の協力のもと課題解説型インターナシップに参加させた。

プログラムが学生の課題解決力の育成につながっているのか疑わしい時もある。本グループで実施した研修の一つでは、課題解決力の育成のために、「女性が輝く社会づくり」というテーマを設定し、学生チームにかなり多くの資料を読み取らせ、ブレーンストーミングやKJ法を使いながら現状の問題点や課題を発見させ、解決策をプレゼンさせた。そして、学生チームの多くが提案したのは、「職場での託児所の整備」といった内容だった。他方、課題解決型インターングруппでは、一部の学生チームは会議室にこもり、模造紙とポストイットを前に延々議論する場面が見られた。我々は学生たちに、現場に戻つてもっと人の話を聞

じるようになことは多い  
の授業やインターーンシッ  
プで起きている。しか  
も、「学生らしい視点  
で」という条件をつけよ  
うものなら、解決策はど  
うか。

課題を見出し、その課題を生み出している要因を特定できれば、つまり因果関係のセットを見出しきれば、課題解決の八製法は達成したようなものだ。

## 2つの 課題

課題解決型提案案の解説

身につけるためには、必ず計画で実施して、実際に課題解決を自ら行なうことが大事になつてゐる。

解題解決に携わる経験者が要請されていくだろう。そして、両方ともに期待している。それは産業界が多い学生に期待している。

を取りつけ、当事者意識ながら解決策を考えていかれる。それこそが現学において分裂して専門教育とキャリアを接続するための思考であり、別に拘らるみるとそれは「や教養」と言ってよにも思えるのであるが、まるがえつて考へると、現在の日本の士抱える課題に対しても自分自身である我々は専門立場から、実現性とは無縁の解決策を露するだけで満足しないだろうか。しかし問題を自分事として取り組む力”を発揮するための教代がいることから、いざなは考えを共感することで、実際にそれぞれの問題を解決に取り組むべきだらうか。

## 2つの課題解決力と当事者意識

シ（経験）によって蓄積される力」としての課題解決力の二種類があると捉えている。

理論的視点による分析や仮説構築が望まれる。だが、知識ストックが不足している学生は表層的な解決策しか提案できないであろう。そこで、PBL科目と講義科目や演習科目を連動させるカリキュラムを導入してある。

状況の中で計画を柔軟に修正するといった対課題スキル、そして何よりも結果を出すまで粘り強く試行錯誤を続ける実行力といった総合的なコンピテンシーが求められる。こうしたコンピテンシー

課題解決力と当事者意識

といえるだろうか。  
多くの企業で、特に新入社員にとって重要なのは、目前の課題に対して、現場で他者と協働しながら、粘り強く解決に取組む実行力である。だがそれだけでなく、自分がどうよう立場から解

家の故阿部謹也教授は、研究対象と自己の立場や価値観を切り離すことを強く戒め、「それがなくては生きていけないと、うる研究テーマを探すように」と常に語っておられた。社会や組織の課題解決に取り組む際、果敢